

ユジノサハリンスク駐在員事務所

【ロシアの結婚式(その2)】(2014. 10月号【ロシアの結婚式】もぜひご覧ください!)

「日本の結婚式に参加しました。とても興味深かったです。だってロシアと全然違います。皆ダークスーツを着て、とても大人しくて、楽しいパーティなのに(・・少し躊躇いがちに)お葬式みたい！」日本をこよなく愛するロシア人女性の話です。もちろん彼女はそれが日本のマナーであることを理解していますが、カルチャーの違いは大きいようです。

今年、公私ともに親しい方の結婚式にご招待いただきました。念願の(?)初体験です。ロシアでは結婚式は役所で行われます。書類にサインし指輪の交換をします。結婚指輪は右手の薬指です(左手だと違う意味になります)。

メインは披露宴です。新郎新婦のシャンパンタワーで幕開け、料理やお酒を楽しみながら、新郎新婦のフィルム紹介、余興やイベント、ダンス、時おり「ゴリカ(苦い!)」コールがされます。「苦いから甘くして」つまり新郎新婦に「キスをして」というお願いコールです。テーブルのあちこちで乾杯(もちろんウオッカ)が繰り返され、ボルテージが上がります。楽しい時間はあっという間です。22時過ぎに帰ろうとすると「えっ、今からウェディングケーキ入刀ですよ!」・・宴は日付が変わるまで続きます。これがロシアです。

【私の結論】おそロシア× → おもロシア○



結婚式会場
(役所内の一室です)



パーティ会場内に
白いブランコが・・

達田 暢

日中経済協会 北京事務所 札幌経済交流室

中国医学、4千年の歴史は伊達じゃない!

鍼灸治療を気休めだと思っていないですか?

先日、突如耳の閉塞感に襲われました。風邪の初期症状と高を括っていたのですが、一向に回復の兆しが見えず病院へ行くと“突発性難聴”と診断されました。この病気、最近ではジャニーズの堂本剛さんが発症し話題になりましたが、西洋医学では、出来れば48時間以内、少なくとも2週間以内に治療を開始しないと聴力回復は困難と言われているそうです。

私が日本の病院で診断を受けたのは発症から20日が過ぎていました。現代医学では回復困難と半ば諦めていた際、知人の中国人から「針なら治るかも」と鍼灸治療を勧められました。私自身、半信半疑、藁にもすがらる思いで通院を始めました。すると、耳の閉塞感・聴力は通う度に症状が和らぎ、治療後の聴力検査でも概ね回復が認められました。中国針治療において突発性難聴は発症3か月以内の治療なら比較的聴力の回復が認められているとのこと。

この病気は日本でも年間3~4万人発症するそうです。もしお知り合い・ご親戚で不幸にも罹患し聴力があまり回復しない場合は針治療をおすすめします。中国医学の伝統は伊達ではありませんでした。



針治療中の小生

村田 雄亮

北海道 ASEAN 事務所(シンガポール)

“Can (できる) ?” “Can lah (できるさ) !”

シンガポールの英語は「シンガポール標準英語」と「シングリッシュ (通称)」に分かれます。前者は他の英語圏とほぼ同じですが、後者は独自の発展を遂げています。その一例が、タイトルに挙げた“Can”の使い方です。

シングリッシュは「意味が通らなくなるギリギリまで」省略します。そのため、“Can”だけで会話が成立します(便利で癖になります)。他にも、中国語やマレー語に似た発音やイントネーションが特徴的で、両者の語彙も混ざっています。

独特の愛嬌を持つシングリッシュですが、国際競争力向上の観点から、政府は教育を通じたシングリッシュ撲滅を図っています。とは言いつつも、国民のアイデンティティとしての地位は変わらず、政府や政治家でさえTPOに応じて使い分けています。例えば、政府の一部CMではシングリッシュのセリフに標準英語の字幕が付いています。道民になぞらえると「なまらうまい」に「とても美味しい」と字幕がついているようなものです。

標準語を話しつつ、親しい仲や本当に伝えたいことは土地の言葉で。こうした「使い分け」の文化は、国の別を問わないようです。

さて、冒頭の“Can”ですが、来星の際には是非使ってみてください。Can lah !



政府系 CM の一場面

矢野 裕之